



日経産業新聞 フォーラム 2008 広告企画

暮らしの安全を探る

安全・安心で快適な住まいや暮らしを実現するまちづくりの重要性が叫ばれている。そうした中、日経産業新聞フォーラム「タウンセキュリティで暮らしの安全・安心をデザインする」がこのほど都内で開催された(主催＝日本経済新聞社、特別協力＝ユニバーサルデザインフォーラム、特別協賛＝積水ハウス、協賛＝セコム)。フォーラムでは、初代内閣安全保障室長の佐々淳行氏と、ユニバーサルデザインフォーラム副理事長の中川聰氏が講演。さらに各界有識者によるパネル討論「タウンセキュリティで暮らしの安全・安心をデザインする」が行われ、それぞれの立場からの意見・提案が活発に展開された。

初代内閣安全保障室長
佐々 淳行氏



講演①

地域セキュリティにおけるパートナーシップの重要性

化したためです。管理職は部下の悪い報告を「苦勞」と言って聞く義務があり、これを経営者層へ即座に報告しなければなりません。これが実社会ではあまり励行されていないのです。

セーフティーマネジメントには自らを助ける「自助」とお互いを助ける「互助」、さらに自然災害などの非常事態が起こったときに救助活動などを行う「公助」の三つがあります。公助が発動されるまでには、閣議決定などで四十八七

さらに、危機は地震などの自然災害だけではなく、昨今のストーカー行為、愉快犯のように犯罪が複雑化しています。その対応措置として私服警察官が増加したため、地域の安全を守る警察官が減少し、空き交番が目立っています。そこで警視庁では、定年後の警察官を嘱託として採用する交番相談員制度を設け、管轄内の空き交番の解消を目指しています。

しかし、学校や地域社会を守るためにはこれだけでは十分ではありません。私たちの暮らしの中で、安心・安全を守るコミュニケーションが必要

ティが必要

です。人間は一人では生きられないものです。そこで、地域のボランティア組織を創設する動きが生まれました。父母や元警察官・教員、地域の防犯協会、交通安全協会などの人たちが立ち上がった子どもたちを守るという取り組みで、これが「互助」です。

最近、運命的共同体(ゲマインシャフト)という考え方が日本の都市から消え、人間の心のつながりが希薄になっていると言われています。神戸市が阪神大震災で被害にあった人たちを対象に実施した調査では、約六割の人が家族または隣人に倒壊した建物の中から助けられたと回答しています。警察・消防・自衛隊といった公助に助けてもらったのは四割程度なのです。非常時の際に、携帯電話がすぐ手元にあるとは限らず、また通報しようと思っても公衆電話はまちからどんどん消えています。そうすると駆け込むところは隣近所、向こう三軒両隣が大切なのです。

非常時では、一致団結して乗り切ろうというゲマインシャフトが大切です。今日のような経済的利益優先共同体では、いざという時に誰も動きません。危機管理で大切なことは、「自分で何ができるか、何を知っているか」ではありません。「何ができる誰を知っているか」が重要で、そのためには心と心のつながりがあるコミュニケーションが必要なのです。

未然に防ぐ危機管理を実行

セーフティーマネジメントが要

安心と安全を確保するためには、危機が発生する前に対策が必要です。この対策には、安全管理(セーフティーマネジメント)と、予測が難しい自然災害などに対応する危機管理(クライシスマネジメント)があります。クライシスマネジメントが有効に機能するためには、まず不断のセーフティーマネジメントが重要なのです。

セーフティーマネジメントの基本は「定時点検」と「異常なし報告」の励行です。この報告を「ネガティブレポート」といいます。例えばバス会社では、出発前に始業時点検を行い、整備状況を確認し、上司に異常なし報告をしてから一日の業務が始まりま

張した際にも、時間にかかわらずネガティブレポートをするように指導してください。夜中に起こす必要はありませんが、携帯電話にメールを送信するだけでもいいのです。事故なんて起こるはずがないと思ひ込んでいると、いつの間にか定時点検・異常なし報告がう

れは危機管理、安全管理上で大切なことです。ここで気を付けるべきなのが、会社でも家庭でも悪い報告を聞いたときに怒ってはいけません。怒ると二度と報告しなくなり、隠し続ける体質に陥ってしまいます。企業の不祥事が相次いだのは、この隠ぺい体質が表面

十二時間程度の時間がかかります。それまでは、自分を助ける自助が不可欠です。そのため水・食料、医薬品などを最低三日分は家庭で備蓄してください。家庭でも安心・安全の基本は、危機を未然に防止するためのセーフティーマネジメントが重要なのです。

講演②

ユニバーサルセキュリティー ユニバーサルデザインで描く暮らしの安心

ユニバーサルデザインフォーラム
副理事長
トライボッド・デザイン代表
中川 聰氏



日本は高齢化が進み、二〇五〇年には人口の半数近くが六十歳以上の高齢者になると予測されています。そのため安心や安全は複雑化し、幅広い世代の共存が求められる時代です。多様な安心・安全のニーズに対応できるようにデザインし

私はデザインを考えると、ハードウェアとソフトウェアとをともに、もう一つヒューマンウェアという視点を大切にしています。従来は多くのモノとしてのハード、そしてソフトの順でデザインが構成されてきました。これからはヒュー

ヒューマンウェアの視点 ハードの開発に期待

ユニバーサルデザインは部分的には矛盾を含み、常にすべての人にとって便利なものとは限りません。一つのデザインには、負の部分もあり、それらに気づき修正することでよりよいデザインを生み出す仕組みを作る必要があります。この意識を持った仕組み作りを取り組むこそが、デザインの本来目指すべき姿

いえる使いやすさと同じようにあいまいなもの。私たちはこの安心や安全を阻害する場面によく遭遇します。私たち社会に多く存在する阻害要因に目を向けず、「気づけない私」になっ

私たちは心の中で何となく感じ取っているデッドゾーン(死角)をきちんと見つめなければならぬと思います。安心・安全は一人ひとりとらえ方が異なります。その違ふ意見を交換することによって、お互いの認識が高まっ

なければなりません。その答えは暮らしの実態の中にこそあると思います。さまざまな人の暮らしのありようをきちんと理解し、そこに見いだされる不安要因を解決することで、安心を作り上げることができると思います。

ハードウェアを開発していくことが求められています。人の意識や行動実態をとらえ、それに応えるようなハードウェアを開発していくことが求められています。そのため身近なコミュニティの役割は重要です。私たちは何か不安を感じたとき、周囲の状況に心配りをする。心配りが声かけにつながり、対話へと広がるのです。そして共に生きるというコミュニ

災害や犯罪に対して個人ができることは限られています。そのため身近なコミュニティの役割は重要です。私たちは何か不安を感じたとき、周囲の状況に心配りをする。心配りが声かけにつながり、対話へと広がるのです。そして共に生きるというコミュニティーに発展していくのだと思います。

「安心と安全の意味はある種抽象的で、デザインで

なっていないでしょうか。

てくるのだと思います。

います。

フォー・エブリワン」とい



日経産業新聞 フォーラム 2008 広告企画

企画・制作=日本経済新聞社広告局

コミュニティーづくりが鍵

パネル討論

タウンセキユリティーで暮らしの安全・安心をデザインする

パネリスト

セコムホームマーケット 営業本部HS新築部部長	秋山 慎也氏
積水ハウス設計本部次長	篠原 惇理氏
国土交通省都市・地域整備局 都市防災対策室長	淵上 善弘氏
ユニバーサルデザインフォーラム(UDF)副理事長 トライボット・デザイン代表 プロダクトデザイナー	中川 聡氏

まちの安全 どう築く

司会 タウンセキユリティーについて、どのようにとらえているのか伺います。

秋山 日本の人口は二〇〇六年をピークに、今後五十年間で約三千万人減少するという悲観的な見方があります。これだけ短期間に人口が減少すれば、多くのまちがゴーストタウンになりスラム化するのではないかと。まだ大きな社会問題とはなっていないですが、大きな懸念を抱いています。

篠原 住宅開発の立場から

シャリストを交えて、クロ

受けて、青色回転灯を付けた専用車両で区内を巡回しています。警察の発表では、当社のケースやボランティアによる運営を含め、こうした車が全国で約一万三千台走っているそうです。

スファンクシオンで取り組む必要があります。二つ目は、防犯は実学であり情報戦なので、犯罪者の行動を知り、犯罪を減らすためのロジックをしっかり頭にに入れておかねばなりません。最後は、個々の建物だけではなく、いままち、美しいまちをつくることです。そのようなまちは犯罪者に緊張感を与え、犯罪の抑止力につながります。タウンセキユリティーへの防犯環境設計は、まちの

構成要素である一戸の建物とまち全体を考えています。〇一年から順次「戸建て住宅の強化」と「防犯まちづくりの推進」の二つのテーマを掲げ取り組んでいます。

いますが、なかなか防犯の視点がまちづくりに生かされていないのが現状です。防災や交通安全について

は、建築基準法や道路交通法があるのに対し、防犯には守らなければならないガイドラインや規制がありません。また、既にできあがったまち並みを大きく変えることもなかなかできません。そこで例えば、防犯だけを目的にするのではなく、街路の美装化や魅力あるまちづくりの活動にまで広げて、防犯にもつなげるような展開も一つの解決法ではないかと思っています。

私たちが描く安全で安心なまちは、自然が豊かにあって、住民が建物の中に閉じこもるのではなく、高齢者も不自由なく戸外に出て、子どもたちを優しく見守っている——そんなまちです。

中川 私も、ただ単に安心と安全だけを目標にするのではなく、コミュニティーの広がりと活力が大切だと思います。ユニバーサルデザイン(UD)を考えると、これがUDだと結論を出してしまうのは大変危険です。UDは常にデリケートなパドックスを含んでいるものだからです。

時には誰かに使っていくモノを生みながら、新しいUD化が進んでいく。対話による地域・社会の教育の中で、何か副次的な新しいものが見えてくるような仕組みづくりが大事なのではないのでしょうか。

淵上 国土交通省では十年ほど前から「防犯まちづくり」に取り組んできました。調査・研究をもとにした「安全・安心まちづくりハンドブック」を作成したり、「まちづくり交付金」の中で防犯対策を支援したりして

い」といった話が出たら、小さなことでもよいので何か対策をしてあげることです。自分たちの指摘で何かが変わることによる達成

感。そういったことの積み重ねで、子どもも大人もまちに愛着がわき、安全への関心も高まるようになります。自分のまちに対する愛着や誇り、それが一番大事な点です。

中川 今回は防犯の話で

すが、コミュニティーとしては何か災害や犯罪が起ってしまったあと、どんなケアができるかで踏み込んで考える必要があります。それとわれわれはそれぞれがいろいろな産業に携わっています。ともにセキユリティーを考えることによって、意外な技術や知識が思わぬところで役立つかもしれない。皆さんの話を伺っていて、そういう可能性も感じました。

司会 タウンセキユリ

ーについては、まだまだ考えるべき課題がたくさんあるようです。本日はどうもありがとうございました。

つながりや 対話が大事

司会 コミュニティー、

対話、縁といったものが鍵になりそうですね。

秋山 現在、インターネットや大容量光回線が普及するなど、IT(情報技術)を活用したコミュニケーション技術は飛躍的に進化しています。セコムという社名は、セキユリティーコミ

ュニケーションを短縮した

ちを実現するには、家族の

もののですが、当社はこれからもセキユリティーを

住民が共有できる「まちのビジョン」づくりに寄与したいと思っています。

中心とした幅広い安全・安心の分野で社会を支える事業を展開していきたいと考えています。

でよく「地域安全マップ」づくりが行われています。そのときに大事なものは、子どもたちから「ここが危な

篠原 安全で住みたいま

ちが大切です。それを基に

点があるから「ここが危な

セキユリティーを核に事業 安全なまちに3つの「縁」の視点を

秋山氏

篠原氏

まちへの愛着や誇り大切 事後のケアにも考慮必要

淵上氏

中川氏

まちづくりに防犯の視点 新しい発見生む仕組みを

淵上氏

中川氏

秋山氏

篠原氏